

---

# HERO

沙里音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HERO

### 【Zコード】

Z9560C

### 【作者名】

沙里音

### 【あらすじ】

男の子の視点でみた恋物語です。\*登場人物\*主人公・三村和俊  
彼女・山下香澄友人・鈴木耕介友人・神田裕弥

## 第一話

どんな時も笑つてた。

どんな時も笑つてほしかったから。

やべ、マジで俺ヒーローみたいじゃね？

「合コンへーー行く行くー！」

気ままに行つた合コンで、俺は“うんぬーのでいい”をした。

合コンへつて並んで座り、二組でトークして感じたか。  
三対二。

でももう裕弥と耕介は相手決つてたし。

余つてゐの俺とー…あと、合コンとか あんまやんなそつた女の  
子。

ちょっと冷めたような横顔。  
なんか初々しい雰囲気。

まあはつせつと言えば、一田惚れだつた。

「俺三村和俊、よろしくー。」

「あ、うん、よろしく。」

つて言つても、かわいーなつて、そんなん程度。  
そんなんじょん? 恋愛つて。

「えーそつちの名前はー?」

少なくとも今までの俺はそうだった。

別にそんな、かなり本気になることなんてなかつた。  
ナイフに向けて手放せつて言われれば、ためらいもなく手放せるよう  
な、そんな。

「ああー、えつと、山下香澄。」

「ふははッ！」

「え? 何で名前ゆつて笑うの?」

「や、ギヤップがさあーあははー。」

「ギャップー？」

あーなんかおもしろい！

天然？

「だつてさあ、ダルそうな顔してつから冷めてんのかと思つて。」

「ええ、ダルそうな顔してた?」

「うん してるー。」

「え、今も?しつれーだなー。」

「あははー!」

「こーゆーノリ、いいな。

初対面の感じしない。

や、あるんだけど。他の男とか女でも、よく。

でもなんかー、うん、なんか、いいな。

「ねえ、アドレス教えてくんない?」

「えつ。」

「“え”つてやうつの四回目ーー。」

「え、数えてたのー?」

「やめははー、五回目ーー。」

「もう、」

何かかわいー。

今まで俺の回りにいなかつたタイプ。

あんま男慣れしてなさそう。

アドレス教えてもらつて、それからけつこう連絡取るようになった。  
映画とかボーリングとかカラオケとか、当たり障りのないここに良  
く行つた。

一緒にいたら楽しかつた。

「好きんなつちやつたんだけど。」

告白したのは、なんつーか、悪く言えばナリコキ。

鹽じゅねーし。

せとじ好きだし。

「じゅーか、ずっと好きだったんだナビ。」

上皿遣こでゅうひ見る。

落ひる。

「う、ん。」

みひしゃせーし。

「うそ、あたしも、好きだった。」

そんな、『恋』でも有り触れてる恋愛。

俺だつてそれなりに恋愛経験あるし。

なのに、何か、それはまるで初恋みたいな恋だつた。

嬉しくて、思いつき抱き締めてしまつた。

「うふ、痛いっ!! 村くん。」

「かわといしー。」

『おも』ーつて、離してなんかやんなー。

「…痛いよ、和俊。」

あー、これを 繰りこつてやーんだ。

高校一年の秋。

“アイ”って言葉のほんとの意味を

初めて知った。

純粋に傍にいたいと思った。

純粋に笑ってほしいと思った。

純粋に何かしてやりたいって。

幸せにしてやりたいって 思った。

## 第一話

「みんなのしゃーこれが田に入らぬか！普通自動一輪免許取つたりーー！」

「えーーー！」

「うっしゃアー長年の夢叶つたりーー！」

「べつに長年の夢でもなかつただる。」

「うおっ、耕介今俺の心の中読んだーー？」

「つづーか、俺達はもう既に乗つてゐし。」

「だな。カズは何で今まで取らなかつたんだ？」

裕弥と耕介は、高校入つたらすぐに免許を取つた。学校とかには乗つていけないけど、あると何かと便利らしい。

俺が持つてないって言つたら、何か意外がられる。

「だつてめんどかつたしー。しかもお前らの乗つてんのつて原付じ  
やん！しかも一種！」

「充分だろ。」

「逆になんでわざわざ自動一輪なんだよ。」

そりや、普通自動一輪は金も時間もかかる。原付一種なら一日で取  
れるし。

でも制限が多いから、どうせなら一種つて思つてた。

でもそれなら、十六歳で取れるもん取つといつて。

「だつてさ、一人乗り出来んじゃん。」

原付一種だと、出来ない。

「…ああ、彼女のためか。」

「なるほどな。」

十八になつたら、車の免許取りに行く。  
そんでドライブとかすんだー。

楽しみ！

それからは、俺のバイクで出かけることも多くなつた。

けつこう遠出もした。

温泉行つたり、つて高校生カップルが温泉かよつて感じなんだけど。  
ま、楽しかったし。

これからもっと色々なトコ行きたいよなー。



俺達は普通のカップルより、少しあめに喧嘩してたとゆう。

つつつでもどれもこれも些細なことなんだけど。  
すぐに仲直りしたし。

でもまあ、色々あって、別れよっかなーって思ったこともある。

だけど俺達は、それを全部乗り越えて、一緒にいた。

一番険悪だったのはー…なんだろ、あ、“お前俺のモーグルト食つたな”事件！？

うん、それだな、それ。あいつめ…俺のモーグルト…しかも逆ギレするしー。

つて、今思つとくだらぬーな、ほんと。

もしかして俺らってけつこー平和?

あははー、あんなんで別れるとか悩んでたんだつけー。笑えるなあ。

…あ、もじつあった。険悪なの。俺の一方的だけど。

たしかー、付き合って始めて一ヵ月くらいんとき。

「あ、香澄? 今ど?」

暇だったから電話して、どうか遊びにこーかなーって。

『え? 今?』

「あれ? 何で小声? もしかしてまた本読んでんのー?」

『うん、図書館だから。あとでいい? 切るよー?』

ええ！彼氏がこんな暇してんのにー！？

香澄は本が好き。

なんか、けつこーかのちつちつヤシとか部屋にあらぬし、よく読んでる。

「今ひとつ？」

『「うん、違うナビ」。』

「なーどつか行かねー？」

『え？』

「つか誰といんの？」

『誰つて、鈴木君だよ。』

……。  
はー？

「鈴木くんつて、え、鈴木くん！？つーか耕介！？ちょっとお前らそこで待つてろな！」

『は?

「だから行くから。」

『ちよといいよ、何言つてんの。』

「行く！」

いいつてば。

なんだよそれ！俺がこんな暇してやるわけないで！——…  
つて、それはかんけーないナゾ。

うわー、耕介？よりもよつて耕介と…。

# 「浮氣！」

『だからそんなんじゃないし。』

だからも何もねー！

こんなとれこまで冷静だし。冷めてるしー。

「とにかく行くからなーー！」

『はあ？ あ、 和俊？』

無理やり電話を切つてやつた。

バイク飛ばして図書館に着いたら、階段上ったところに 香澄と耕  
介がいた。

「何やつてんだよお前、りはーーー。」

怒鳴つたら、なんか適当に言い訳しゃがつた。  
俺がそんなんに騙されるわけねー！

「和俊、ほんとに偶然だつたし本の話しかしてないよ。」

耕介も、本が好き。  
気合のいいかな。

「俺はいいけど、彼女なんだから 香澄のことはくらいに信用…。」

…は…?

「香澄…」

耕介は、しまつた、つていう顔をする。

「…別に深い意味ないから。呼びにくかつただけだし。」

「呼び…かとか変わんねーじゃん!」

この間に呼び捨てしてんだよ…!

まさか 香澄も耕介とか…。

「ねー、くだらないって和俊ー、もいつやめよーよ。」

香澄の言葉に目を見開く。  
何だよそれ！

「下らない！？お前なア、いつひがどんな。」

「もいつ和俊！」

香澄がいきなり大声だした。  
ちょつとたじろぐ俺。

なんだよー！俺はぜんつぜん悪くねーのにー！ー！

「あのね、あたしは！和俊だけでーから。」

…へ？

「…。」

俺は声も出なかつた。

多分耕介も呆然としてて、香澄はけよつと照れてる。

「…じゃあね、帰る。」

俺達に背を向けて、図書館の前の石段を降りていく。  
家が近くだから、歩いて…。

「あ、香澄…。」

声だけかけて、でもまだ驚いたまんまで追いかけらんなかつた。

なんで…別にあんなのふつーじやん。  
もつと凄いのとか、今までいつぱい言われ…。

あ、そつか。

香澄は違つ。香澄はあんま言わない。

「…。」

口に手を当てる。

やつべ…嬉し…。

俺。

こんな 惣れてたつけー…。

「…カズ、ごめん。呼び方、嫌ならやめるから。」

なんか歓喜しそぎて、横に耕介がいるの忘れてた。

あ、そつか。呼び方で俺怒つたんじやん。

なのに今となつては、全然怒る要素なんてない」とのよつて思えた。

「…お前だから、許すんだかんな。」

俺つて単純！

「はは。」

「何だよ。」

えー、こんな場面で笑うかあ？ふつー！

「いや、カズつてかなり嫉妬深いんだな。初めてみた。」

あ、…うん、そーかも。

…。

俺もこりんなん、初めてかも。

つーかわ。

：なんか俺、何で怒つてたんだろ。

別に大したことじやなくね？

俺だつてさ、女の子と付き合つたときに他の子と遊びに行つたことあんじやん。

：香澄と付き合つてからも、一回くらい、あつたかも。

「みつともねーよな、かなり惚れてるかも。」

何それ。

自分は良くても相手のことは許せねーの？

それってどーみ、俺。

「確かにみつともねーな。」

「ええッ、そーはそんなことねーよつて言つだらぶつーーー。」

「はみ。でもいいんじゃん？それが恋愛つてやつだら。」

耕介の話を聞きながら、いつもみたいに話す。

やつ。俺つりつて、簡単に壊れねーよなつて、思つた。

夕方、バイクでゆつくつと走る帰り道。  
空が赤くて、なんとなくお前を想い出した。

なんか…。

俺 いつの間にか、こんな好きになつてたんだー…。

そつ思つたら笑えた。

喧嘩中なのに、幸せで笑つてしまつた。

謝つに行つ。

いつもみたいに、きつと冷めた顔で、もーいよいよついつい離つてくれる  
だろーから。

あ、でもやっぱ耕介は警戒範囲ね！  
油断大敵！

「ヒーローとか好きなの？」

俺の前には映画のパンフレット。香澄は本を読んでる。

パンフレットのキャラチフレーズを心の中で読んだ。

『世界中が絶壁の壇に溢れても、壇のためだけに戦い続ける』

：だつて。笑える。

ヒーローって世界中のために戦つんだと思つたけど、違つんだ？

「んー、嫌いじゃなこよ。」

映画みよつーって話から、ヒーローの話になつた。  
なんか反応してたから。

「意外ー！ヒーローとか王子様とか大ッ好きなんだ！」

「そこまで言つてないよー！」

あははー！意外すぎて笑える！

だつて冷めてるしー。

そんなん苦手そうなのに、嫌いじゃないってー嫌いじゃないってー！

でも俺は、お前が望むなら何にだつてなれるんじゃねーかと思った。

だから。

「じゃあ俺は、ヒーローになる。」

だから、嘘じやねーよ？

ほんとにほんとこ、やつぱつみつともなこと」NIRIなんて見せたくな  
いつて思つたんだ。

俺はお前にといひ、いつでもかつNIRIヒーローでいたい。

なんて、どつかのベタな恋愛映画みたいだな。

本氣で恋したら、いんなバカみたいな」と思つんだつて知つた。

何か笑えるなあ。

俺つてこんなのかつこわる」と思つてたから。

なあ?

“NIRI”もある、いんなりふれた愛情だけ。

いつでも笑ってるよ。

いつでも笑っててよ。

ひっさしじぶりーの、買ーい物ー。

今日の俺はあー上機嫌ー。

「ん？」

ほんとに久しぶりに、一人で買い物してた。

今日はラッキーデー。

一人で買い物な行くとよしー…って、テレビの占い番組でやつてた。

ぶはは、笑えるー。別にそんなのどーでもいいんだけどさ。

何でも信じてみたくなる。

なんかそんな、清々しい気分。

実際良い買い物ばっかりしちやつたしー。

「おおお？」

そこで、めつちや可憐いの見つけた！

「ねつちゃん、これいくらー？」

「お芝、お田が高ーねーぼつやーママあさるのかー?」

「ぼー やじや ねえよつ！ 彼女に プレゼントーーー！」

「わ、すまんすまん。」

おひむせん田え悪いのか!?

高校生にもなつてぼうやつて言われたのは初めてだ！！

……えーと、出店？ってゆーの？「これ。  
なんか路上に座り込んで売つてんやつ。そこに可愛い指輪発見！  
ほんとにあいづに似合ひやつ。

やつぱ今日の俺つてついてる感じ！――

「いれりゅーだい。」

「はーん。」

キラキラしてる。

かわいーし、きれー。

今度遊ぶときにあげよー！プロポーズでもしちゃうかー？

……つて、バカだな。  
高校生のくせになー。

俺は出店のおひちゃんからその小さい指輪を抜け取つて、鞄の中に入れた。

喜ぶことなり何でもしつせりたかつた。

いっぱい知りたかった。

こんなの渡したとき、どんな顔するんだるーとか。

そんなひつやなーじ。

あ、そーいやもうさき合つて一年だな。

だけど俺達に特別な日なんていはなかつた。

何でもない毎日を一緒にいられれば嬉しかつた。

「じゃあな、来週の日曜日、バイクで迎えに来るから。」

いつも通りの、デートの帰り。

やつぱり指輪は渡さなかった。まだ鞄の中。

なんか特別な雰囲気がほしーよなー、うん。

「どこの?」

「まあまあ、行ってのお楽しみー。」

「なにそれー。」

つて、「めん。  
まだ決めてない。

別にいいでもいいんだナビー、やっぱ一周年記念も込めて?…な  
ーんて。

「またな。」

いつもみたいに、それだけ言つて別れる。

名残惜しむでもなく、手を振るでもなく。

いつも通りの 終り。

思つてなかつた このときは。

もう会えないかもしれないって、一瞬でも考えてたら、もつと特別  
な別れ方も出来たかなあ。

…あ、もう、信号が長い。

いつも通りのその帰り道を、いつも通りバイクで帰る。

信号を待ちながら辺りを見渡した。

あ、ここ、前に耕介と裕弥と海行つたときにも通つたな。

あん時は一裕弥が落ち込んでー、励ますために…。  
あり？裕弥何で落ち込んでたんだつけ？

…まあいつかあ、ナイーブだしな、あいつ。色々あんだ、うん。

つーか励ますために行つたのに結局俺が一番はしゃいしゃつたんだ  
つけ？

そーいえば耕介が怒つてたよーな。

ふつ、懐かしー。

…ん？うみ？

…海！…そーだよ海じゅん！海海！…雰囲気と言つたら海だよな！

おおーー！

俺って天才？

そーだ下見しとくか？確かに右折だ、ここ。

信号が青に変わる。  
とっさに決めた右折。

対向車がいなくなつて、走り出す。

トライックの陰。

スピードに乗つた乗用車。

……右直事故つ！

「ツー！」

キィイイイイイイ

痛くて痛くて 薄れしていく意識の中、なあ？

死ぬかつて思つた瞬間 お前だけが俺の視界を占拠してた。  
おかしいよな。

気が付いたら、何か体が自分のもんじやないみたいだつた。

力、入らねー。  
動かない。

駄目だ。

何これ。

「……す……し……？」

誰。

何怖い。

「和俊…？和俊、…ツ和俊！？」

何回も呼ばなくとも聞こえてるって…ああ、母さんだ。

あれ…？父さんもいる。

あ、視界がぼやけ…。

ああ、誰だ？もう一人…ん？一人？

ボーッとしてる。

痛い！頭…腕も、足も…全部痛い…！

「三村和俊くん？分かるかな？」

だれ…知らねー声…。

白い。

ああ…医者?  
看護士もいる。

何だこの縁つぽい部屋。

「…。」

体中に、何かついている。

気持ち悪い。重い。

取つて なに 嫌だ。

「和俊！良かつた 分かるのねー？ねえ！」

「和俊……！」

母さん 父さん。

おれ 僕。

ああ、事故つたんだっけ。

運わりー。

……違つか。

バカだ、俺。偶然事故にあつたわけじゃねーよな。  
今まで 偶然 事故にあわなかつただけなんだ。

いつ死んだつておかしくなかつたのかな。

そう思つとちよつと ゾッとするけど。

あの日 お前を想いながら 海に気を取られて。  
死ぬと思つた瞬間に それでもやつぱりお前を想えたこと。

名譽だつて言つたら 怒るかな。

「…。」

医者は、母さんと父さんに話があるって言って隣の部屋に入った。  
暗い部屋だなあ、なんかやだ。

こわい。いたい。きもちわるい。

おれ 死ぬ？

…死ぬの？ なあ、誰か。

誰か！

『かずとし。』

……香澄。

香澄、あいたい……。

……や、だめだ。

だめだ、じんなとこ、見せらりんない。

やばい。

田を闇じたり、死んでしまことやつになる。

ぐるぐる、頭回る。

痛い。

「三村君、じめんな。体気持ち悪いだろう、今拭くから。」

男の看護士が話しかけてきた。  
拭くつて…。

そいつは、俺の着てるものを脱がせて丁寧に体を拭いてくれた。

…やめよう、気持ち悪い。

いやだ。

悔しい。

こんなも自分で出来ない。

そつか。

俺はひのへりへのひに続けてた？

その間、 体についた気持ち悪いもの。

口に酸素送るやつ？とか…あとケツも気持ち悪い…。  
そりゃ、寝てる俺がトイレに行けるわけないけど。

悔しい。  
悔しい。

それを声に出来ないことが また。

「…。」

泣きそうになった。

もうこいつ死んでしまいたいと思つた。

「和俊……」

母さんと父さんが帰ってきた。  
悲しい顔？

ああ やっぱ俺 死ぬの。

「和俊、 大丈夫？どこか痛いとこない？」

バカだな…… 痛いよ 全身痛い。

でもそれより、悔しい。

トイレも行けない。  
風呂にも入れない。  
汚いところ全部見せて 全部世話をしてもうわなきやなんない。

悔しかった。

恥かしかつた。

こんななんなら、死にたい。

もう死んでしまいたい。

ただの晒しもんじやん。情けねー。

「和俊？」

死にたい 死にたい。

苦しき！しんどい！  
わつ……嫌だ……。

「し……つ、悔し……。」

どんなに苦しくても、それを吐き出す術もなかつた。

悔しさに 拳を握り締める力もなかつた。

何だよ俺。

第一声がそれかよ。

親不孝もんだあ……「めん……。

ごめん 母さん 父親……。

母さんは泣いた。

父さんはそれを支えるように立っていた。

俺はそんな一人に目を向けながら、やっぱり生きたいって思った。

また母さんと父さんが隣の部屋に入つてくる。  
なんだよ、それ。意味分かんねえ。

したら、母さんだけが入つてきた。

「…。」

俺の手を握つて、そのままジッとしてる。

あつたかい あつたかい。  
生きてる。

「… の……。」

「え? どうしたの? 何和俊!」

かろつじて声が出る。

あれ、大分楽になつた…？

ああ、痛いの通り越してんのかな。

うわ重症じやん。

「れ……死……の。」

俺死ぬの？

こわいな。

こわいなあ、実際こなんなんなつてみると。

ほんと悔しいよ。

「……ツ……ないで……！」

え？

なに、母さん。

「死なないで……え……ツ……！」

泣き叫ぶような母さんの声に、不覚にも泣いてしまった。

……泣いたといつよりも、勝手に涙が溢れてった。

答えになつてねーよ、母さん。

母さん ごめん。ほんと、俺親不孝もん……。

悔しー……。

悔し。

「耕介 裕弥 呼ん。」

「あ 僕のこと なんかで なあ。

親が泣いてるの見んのって、けつこー嫌なもんなんだからな。

やだな。  
泣くなよ。  
泣くなよ。

「かあ……せ……。」

しゃべりにへい。  
なんだよこれ。

「……ん。」

「耕介君と裕弥君？分かつた！今呼んでくるからね。」

「あ……。」

俺がまだ続きをがあるよつに顔を出すと、母さんは立ち止った。

「香澄……。」

「分かってるよ、香澄ちゃんもひやんと……。」

「……呼ば……な……。」

「え？」

呼ばないで。

あいつだけは。

ヒーローでいゆつて約束したんだ。

「……こんな……見せ……。」

見せねえよ。  
あいつだけには。

「…分かつた。」

ああ、すげえ。

母親つてすげえ。

途切れ途切れの言葉、自分でも分かんないくらいなのに。こんな  
で。

母さんはまざ隣の部屋に入つて、医者の許可を取つたようだつた。

それからすぐに外に出て、またすぐに戻つてきた。

「すぐ来るからね。」

すぐ来るからね　すぐ来るからね。

そればっかり繰り返して、俺の手を握った。

「い」めちゃうつと、出でて……。

「…和俊。」

うん、ごめん。

そりやこんななんでも、息子だよな。

心配だよな、ごめんな。

「うん、分かった。分かったよ。」

親不孝ばっかの俺に、母さんは力強い顔で頷いてくれた。

そして医者も父さんも隣の部屋から出てきて、俺に一言ずつ声をかけて外に出て行つた。

何て言つてたのかは、よく聞き取れなかつた。

なあ。

俺 お前に何残してやれるだらう。

そう思つたら、一つしか浮かばなかつたんだ。

ちやんとかつーひーとー」見せるよ、最後まで。

だつて約束したじゃん。

どんな時も 俺はお前の ヒーローでありたい。

## 第十話

耕介と裕弥が入って来る。

うつわ、何泣きそうな顔してんの、二人とも似合わねー。

あはは…。

……笑えないよ。  
笑えない なあ。

「カズ！！」

裕弥は俺に勢い良く乗つかつてきた。  
うおっ！ええッ それはないだろ！

「ゆ……や……重……。」

「あツゴーもん！」

も一…相変わらす…。

ごめん。  
心配かけて。

」  
。」

あ…れ、 いな  
い。

そりや俺が呼ばなかつたんだけど。

香澄… そんなんで納得するやつじやねえのにな。

「香澄」？

「あ、起いて来るよ。今寝てるんだ。無理やりにでも連れて……。」

# 「耕介！」

うう……てえ……思わず大声出してしまった。

……なんだ、出るじゃん。  
だいじょうぶ、うる。

そつか、寝てたんだ。良かった、ちよーど良いじゃん。

「…………いい…………か、う。」

「……頼み……ある……ん、ナビ。」

「え、なに?」

「……瓶……録音、 därleu...。」

何を残してやれるかな。

「ごめん、会つてもやれねえで。  
ああ 情けない。」

「俺持つてくれるから! 家近くにから、すぐ……」

……ちりぢり。

「」あ……。

……。

「おれわ……あ……ハーロー……なんだー……。」

「え？」

裕弥がテープを取りに行ってくれたあと、残った耕介に声をかける。

「耕介に……」

「だからさ、……最後までかっこよくなきゃ……」

「こんなの、見せるわけには行かないってゆつた。  
誓いだつたのかも。

うん、ごめんなあ、香澄……ごめん。

耕介は、ああ、と頷いてくれた。  
取った手は、やつぱり温かかった。

「……」

耕介に、俺の口についてた何か重くて喋りにくいやつを外してもら

つた。

急に憲吾じへなつたけど、しばらく沈黙が続いて慣れていつた。

「…。」

バンッ、ビュアが開いて、裕弥が入ってきた。  
おお、早い…。

「めさん…めつひや走ってくれたんだろーな…。

「…」それで、良いか。」

「あつがと…。」

「おひ、ヒープレーダーかよーなつつかしー。

裕弥のおひやんちよつと時代遅れだからなあ、助かった。あは…。

「…」持つて…。

俺はそれを耕介に持つてもうひとつ、一つ息をついた。

ふう。

苦しい。しんどい。痛い。怖い。

だけどお前のためなら 最後までヒーローになる。

「俺が、ばいばいって……やつたら止めて……」

「……うん。」

ヒーローになる。

「……」

力チ と音がある。

そう、俺はヒーロー。

お前のためにだけ 生きていたヒーロー。

「あー…聞こえてる? 香澄。」

声が出る。

わいつきの掠れた声じゃなくて。

あー、俺、この声どいやつで出してんだ。

「なんかこきなつ」めんな、今つてもやれねえで。」

やつぱ俺つて超人的なんじやねーのー? なんか痛みもふつされたよーな…。

「湿つたくなるかもだけど、きーで。いっぱい言いたいことあんだよ。」

うん。

「こいつがいる。ここに残したりとばかり。

あー、もったいもったいもったいと一緒にいたかったなあ。

でもそんなことないせんない。

弱音とか絶対、言わない。

「お前と話をして、初めて一田惚れだつたんだって言った。

いっぱいあった。

出会いから一年。

ほんとにこっぽい。

「守れなくらいめんな……。」

“すーっと”

「めんなあ あの時は、せんとすずと一緒にいたって思つてたんだよ。

“一緒に いよつた”

「お前のー、妙に冷めてるといふとかさあ、かなり好きだつたわ、うん。」

お前にこいつも冷めて、やあ。

ほんと。

「まあおかげで喧嘩したこともあつたけどなあ。楽しかつたけど、良い想い出ばっかりでもないよな。つか喧嘩のが多かつたっけ?」

でも、喧嘩の想い出をえ楽しかった。

ほんとだよ

「けつじつ本筋で、悩んだ」ともあつたよ。かなり苦しい時期もあつたし。」

まあ誰にだつてあるよな。うん。  
別れ話とかも、あつたつけかなあ。

「…。」

あ、なんか、しんみりしちゃいそー。

「…うん、生きてたりぬ、苦じこよなあ。おなよ。

バカ。

弱音は言わねーつて、決めたのに。

「だつて俺、お前がいなくなつたらマジジ耐えりんねえし。」

うわ。こわ。

お前も？

これ、聞いてるとき。

「お前もおんなじ気持ちなんかあつて思つたら、また苦しー…。」

座っている耕介の顔が、泣いてるよつて見える。  
傍に立つ裕弥の拳は、強く握り締められていた。

「でも、生きてたら苦しいけど、生きてることって すっげー嬉しいよ。」

うん。

死ぬつて思つてから気付いてんだけどね。

「だかんな、笑つててな？したら俺も嬉しいから。」

おおー！めっちゃヒーローみてーだ！  
あはは、なつさけねーヒーローだなあ。

笑つてて じゃなくて、本当は。

俺がお前を  
笑わせてやりたかったな  
もつと。

ずっと一緒にいたかった、なんて。

言わないけどな。  
言えないけどな。

「なあ？ 俺はえーえんのヒーローになるから。」

だから 思つていて。

最後までヒーローだったって。  
こんなカッコ悪いじゃなくて。

ちやんと最後まで。

「あつと お前だけの。」

笑つてたつて。

「今までありがと。お前のおかげでわあ、すげえ楽しかったよ。」

けつこー長く喋ったかな。  
疲れた。

でも言いたかったのは、生きてつっこい。

「あ、初めてゆうなあ、今まで好きだーってしかゆつなかつたか  
15。」

笑つて ずっと。

ずっとひきつ。

「寒いって笑うなよ？」

今まで。  
今も。  
この先も。

「愛してる 香澄。」

愛してゐつて こと。

「。」

名残あしー。

お前いま どんな顔してんのかな。

やつぱ俺はいないんだるーな、もうこの世の何処にも。

「ばいばい。」

力チ と音が鳴つて、俺の言葉通り、耕介はテープを止めてくれた。

さよなら 香澄。

もう会うことのない“いとしい人”。

俺に、初めてこんな気持ちを教えてくれた人。

さよなら 愛してる。

愛してる。

裕弥は何でだつて聞いた。

苦しいなら苦しいって。

生きたいなら生きたいって 言えぱいにのこつて？

裕弥はまだ、この気持ちが分んないだろーな。

誰かを愛するって 多分「ハッピーハーツ」と。

何かしてやりたいって思ひこと。

香澄 いつだつて俺は。

お前のヒーローでいたかったんだ。

「本音なんて、あいつこな……廢してるから、書つてやしない。」

だから ごめんな。

言えねえわ、本音なんて。

苦しいなんて。

生きたい なんて。

一緒にいたい なんてさあ。

「。」

裕弥、お前はまだ分んないかなあ。

難しいよな。

俺だつて知らなかつたよ。

香澄に会つまでも「こんな氣持ちだ。

「……俺ら何だ?」

死ぬときここまで、お前の前ではカツコ良くありたいなんて、貪欲だったかな?

「、じゃあ……俺ら何だ?」

きっと、二人なら。

どんな酷い顔を見せたって、思い出してくれるだろ?って。

ずっと一緒に笑つてたこととか。

「お前らは……大好きだから……言つても……い?」

大好きだから 一人には、本音さえ全てブツケテ泣いた。

生きたい。

死にたくない。

怖い。

もつと一緒にいたい。

会いたい。

いやだ。

情けないな。

これがヒーローだつてゆう俺の、本音だよ、香澄。

お前の笑った顔。

仮面

泣いた顔も。

照れてるのも怒ってるのも、悲しんでたり怖がってたり。

もう一度と見られないかな。

もう一度見たかったな。

こんな気持ちが恋なんだって 出会って初めて知ったんだ。

耕介。

俺が気付いてないとでも思つてる?

言わないけど、頼むな、香澄のこと。

悔しいから言わないけどな!

耕介も裕弥も泣いていた。

手を取り合いながら、一体どのくらい泣いただらう。

体の何処にこんな水分あつたのかなつてくらい、涙は止めどなく溢れた。

：人間つて体中の水分、半分くらいなくなつたら死ぬんじやなかつたつけ？

三分の一？あれ、二だつけ？

：あ。

あ！？何、大事なこと忘れてんの俺！

泣いて泣いて泣いて、ムードだらけだったその病室で、俺は一人手を離して二人を呼んだ。

なんか分んないけど、笑えてしまつた。

「かば……ん、」

俺は裕弥に、事故の時に持っていた鞄を持って来てもらつた。  
良かった。あつたんだ。

もう鞄さえグチャグチャになつてんのかと思った。

耕介が中を開けて、指輪を取り出してくれた。

傷一つ入つてないじやん。  
奇跡だ。

「それ……渡して……。」

もー。

何やつてんだろ、ほんと、俺。

「約束の日……海に行くつもりだったんだ……。」

「うん、約束いつぱいしたのに。」  
「ぜーんぶ破っちゃうんだよな。ごめん。」

「海? こんな寒いのに……?」

「はは……、ん……。ほり、海が一番……雾岡<sup>きりおか</sup>出るじゃん?」

「ふ。

笑えるよなあ、ばつかみたい。」

「うん。それ、本気だつたなんて。」

「日曜日<sup>にちようび</sup>にさあ……朝からバイク飛ばして……海行って、プロポーズ  
でも……て……。」

「ああ そうだ。」

「シャレになんね……田羅じやなくて良かつた……。」

そうだ、お前を、後ろに乗せて。

あ、れ。

良かつた。良かつた。良かつた。

良かつた？

こんな痛いの。  
こんな苦しいの。

「あいつが無事で……かつた……ッ。」

生きてて。

良かつたよ。お前は 生きてる。



なあ。

お前の笑顔は連れてかない。  
ずっと笑つててほしいから。

俺は涙を持っていく。

だから俺が死ぬことで 泣いたりなんかしないでほしい。

覚えていてほしいのは 死んでいくことじゃないんだ。

生きてたことだよ。

ずっと一緒に 生きてたこと。

「医者がなんか、帰れって…。」

「絶対明日も来るからな。」

裕弥も耕介も泣きはらした日だった。  
見たことねーの。あは。

はは…。

「…ん。」

明日 なんて 僕には。  
ないこと多分、何処かで感じていた。

それでも出来るだけ自然に笑った。

「じゃあね。」

それに安心したように、耕介が言つて背を向ける。

裕弥が一度だけ振り返つて、小さく笑つてまた俺に背を向けた。

一気に静まりかえったそこに、すぐに母さんと父さんが入つて来る。

おわ。

もしかして、ずっとこの外にいたのかな。

「和俊… 今夜はお母さん達、ずっと此処にいても良い…？」

母さんの言葉に、俺は小さく笑つた。

表情で表すことしか、もう、返事も出来なくなつてた。

気付けば視界もぼやけていた。

ボーッとしていたのか、寝ていたのか分らなかつた。  
ただ体が、ほんとに自分のものじゃないみたいで。

「…。」

ふわふわ 浮いてる。

「…よ、る？」

「和俊…起きた？もうすぐ朝よ。窓もないから、分んないね。」

母さんの即答が返つて来る。

その声を聞いた途端何でか眠くなつて、母さんは起きた？と聞いたけど、やつぱり自分はボーッとしていただけだったと語つた。

眠い。

「和俊、寒くないか？」

「暖房きかせてもらひえないかしらね、…。」

父さんの声も母さんの声も優しかった。  
優しすぎて怖かった。

「…。」

小さく小さく声を出した。

何かが燃え尽きそうなことを感じた。

「なに？ なに、和俊。」

あ、届いてたんだ。  
よかつた。

「…れ、」

やべー。  
また泣きたがつ。

なんで。

「…れ…最後に、会つてしまふ」とも……。

何処までも 何度も 思つんだ。  
お前のことがつかり。

お前の「じめっかり。

「何も……て、やれなか……。」

最後まで元気だったって、思わせてやりたかったんだ。

あのテープ聞いて、お前がそう思ってくれると良いな。

でもや、本音聞いてほしかったのも、嘘じやないこよ。

「……和俊……。」

意地張つて、見せらるんなくて、会わなかつたけど。

会いたかったのも ほんとだよ。

「和俊……違つわ、そうじやない。」

ゆうこが、ゆうべつと話す。

「和俊は 香澄ちゃんに、してあげたい事がいっぱいあったのよ。…ね、こいつぱこあつて…ありすきて。」

俺は黙つて聞いていた。

もつ瞬わするのを辛かつた。

「じつあげる事が出来たたくさんのことを、何でもなことのよつに思つてしまつだけよ。」

「せひ、思つて出しつて? だつて私、見たことないもの。」

『和俊』

『あのね あたしは』

『和俊だけでいいから』

「和俊の隣で、幸せそうな 香澄ちゃんしか、見たことないもの。」

『うん、あたしも 好きだった』

香澄。

「……？」

香澄。

俺 愛された?

ちやんとお前に 愛された?

うん。だったらそれだけで、生まれた意味、あるって思えたよ。

変かな。

「ん……へ、ん。」

なあ、此処で懺悔なんだだけjee。

俺さ、謝らなきやなんない」とこっぽいあんだ。

えっとまあ、香澄のピアス壊しちゃったの俺なんだ。

お前いつの間にか壊れたってゆつてたけど、俺が踏んじちゃったの。  
痛かったわーあれ。…や、マジjめん。

あと新発売のお菓子、なんて名前だっけ？あれ一緒に食おうって買つたのに一人で食っちゃったこと。  
だっておこしかったんだもんやー。

今度お前にも買つて…って、今度なんてないんだっけか。 うん。

…あとは、あ、香澄の部屋の壁紙の隠しきに勝手に俺の名前書いて  
やつたんだった！

見つけたりビビるだるーなー。『めんつ！

あ、それここに前借りたじつまだ返してないし。  
香澄と付き合つてからも何回か女の方と遊んじゃつたこと。  
耕介のこと、疑つたことも。

あとで、約束、守れなくじめん。

一緒にこなつてやつたのにわ。

うん 僕 死んじゃつじめん。  
最後までカツコ付けてばっかで。

ビーしょーもない彼氏だったよな?

よわしちこ ヒーローだったよな。

「…ん。」

俺は思いを巡らせながら 母さんの声に涙を流した。

母親を、生まれて初めて、めちゃくちゃ強いと想つた。  
良い親に恵まれたと思つた。

俺は笑つた。

泣きながら、笑つた。

泣き叫びたかったけど、笑つてた。

静かに静かに。

最期は笑つていよつと思つてたから。

憶ていてほしいのは、泣き顔なんかじやなかつたから。

母さん もつと。

香澄も同じ事を言つてくれるんじよないかなつて 思えたんだ。

なんか 香澄の声みたいだつた。  
安心した。

ほんと安心した。

「…。」

全部許された、みたいな感じ。

「うううと寝ていい? ひとつだけ。」

母さん 僕は、嘘つきで。

どうしようもない息子だつたけど。

これほど残酷な嘘はないよな。ごめん。

でも俺は、今日せび鹽つきで良かつたって思ったんじゃないよ。

卷之二十一

最後にそう言って、優しく笑う母さんが見れたから。

ごめんな。  
最後まで  
こんなんで。

ふと笑つて目を閉じる。  
樂になれた瞬間。

—

ごめん  
みんな。

「…………？」

そう覚えていたいのは、泣き顔なんかじやなかつたから。

「和俊：？」

覚えていてほしいのも やつぱり笑った顔だったから。

だからこんなを見せられない。

好きなヤツにはカツコイイところだけ見てほしいうて、別におかしい」とじやないだろ? なあ、香澄。

「ねえ……、ね……。」

「めんな、香澄。

お前の中の俺が 永遠のヒーローになるよ!」

ずっとずっと。

すーーーっと、ヒーローであり続けるよ!」

「いやあああああつ、和俊いいい!—」

いつも陽気な母親の。

叫ぶ初めてのその声は　俺に　届くことはなかつた。

さよなら、大好きな人たち。

最後まで 最期まで ほんと大好きだったから。

でも ごめんな。

やつぱり最期まで お前ばつかを思つてたよ。

一緒にいたいって思うことの もしも何かがいけなかつたなら。

残酷だよナア カミサマ。

天使になんて なれねーけど。

この空を飛び回つて。

お前が呼んだらすぐに駆けつける。  
永遠のヒーローになりたい。

たつた一人 お前だけの。

この目が見えなくなつても この耳が聞こえなくなつても。

お前の笑顔は忘れないから。お前の声は思い出すから。

この身に実体がなくなつて、抱き締める腕をなくしたとしても。

ずっとずっと お前だけを思い 想い続ける。

こんな人間離れした感情、生きてたら絶対味わえねーよ。

生きてたら、生きなくちゃいけないから。

お前一人の存在で、笑ってられるわけじゃないから。

でもさ、でももう俺、食料もいらないし。  
世間体氣にすることもないし。

勉強しなきやなんないわけじゃないし。

将来とか考える必要もないし。

病氣にもならないし眠ることもないから。

だからお前一人の存在で 笑ってられるよ。

お前も笑つててよ。

俺つて嫉妬深いから、許せるかどうか分かんないけど。

俺じゃない誰かの隣で 楽しそうに笑つててよ。  
幸せだつて言って。

…あー、やつぱぱちょっとムカつくかも。

…うそ、うそ。

お前が笑うと 俺も嬉しいから。

未練なんてないよ。

… とま、 やっぱりみつこみたいかなー？

いや俺ヒーローだから、ぜつヒーローは出れないんだが。  
新発売のお菓子とかまだ食べてなこやつあるじゃー。

アイスの季節も待ち遠しいし。

ゲームだってまだクリアしてないのあるし。  
バイクだって全然乗り足りないだよな！

あとあと、 … あと。

もつと一緒にいたかったな なんて。

言つたらお前、 なんてゆうかな。

ほんと、 ヒーローなんかじゃないよなあ…。

やつでもやれないくせに、 一緒にいてもやれないくせに。

ただ最後まで かつじよへありたかつたなんて。

なあ？一番の心残りは、お前との時間の後に死んでしまつことだよ。

お前、自分のこと、責めないでな。

お前とのデートの帰りにさ、お前のこと思いなが事故にあったなんて、俺ことひちゃ誇りなんだけど。

でもお前ことたらこんな気持ち、重いよなあ。

ね、俺、バカだから。  
他にどんな幸せがあるかもしらないで、お前を本気つ好きになれたことを世界一の幸せだつて思えちやうんだ。

だから絶対に、お前のせいじゃなーよ。

何度も繰り返しても、俺はお前に出会つ道を選ぶ。  
例えまた苦しんで死ぬことになつても。

だから責めないで。

お前はお前を責めないで。

“世界中が哀しみの涙に溢れても 僕は君のためだけに 笑い  
続けよ。”

なーんて、一緒にいらっしゃった、どつかのヒーロー映画のウケ。  
ウケ。

あり、ウケウリだっけ？

ウケウリ？ウケウケ？

うーん、国語苦手ー。まあ良いや、うん。

三村和俊。

えーえんの、ヒーローになりたゆきます！

見守ってる。

お前達は。

お前は 生きて。

いつでも笑ってるから。

いつでも笑っててな。

お前の幸せが  
俺を幸せにする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9560c/>

---

HERO

2010年12月26日19時19分発行